

つゞきく生きる願ひを心する

春をたのしみ朝を花の舞ふ小鳥の便所^をに

秋は^も今土を耕す一くし眺め上り

春をたのしみ朝を花の舞ふ小鳥の便所^をに

秋は^も今土を耕す一くし眺め上り

春をたのしみ朝を花の舞ふ小鳥の便所^をに

秋は^も今土を耕す一くし眺め上り

春をたのしみ朝を花の舞ふ小鳥の便所^をに

秋は^も今土を耕す一くし眺め上り

春をたのしみ朝を花の舞ふ小鳥の便所^をに

0004

JAN 31 1929

春日

朝霞が朝入たる路を子供人白舞事で通る

大分二区もういさうた

しほろくし 等々一区 和の目前を人へ行く

さあ、さ 道は静かに本を舞わも通る、あ

一課丸を返る

ささくの方で

あつたにハクリのこのとき、言に 保野る同え、来る

五三 一課 井田之

0002

JAN 24 1929

電燈の明。

月夜に竹の影を長く思ふに
力持一筋にそゝ痛く生けり道に
はけりさうは
し無きわさ

和雲煙をけし
来りた多め和こり

和の身とアうに遠く野を
来りた

和の身とアうに遠く野を
来りた

和の身とアうに遠く野を
来りた

和の身とアうに遠く野を
来りた

和の身とアうに遠く野を
来りた

和の身とアうに遠く野を
来りた

和の身とアうに遠く野を
来りた

和の身とアうに遠く野を
来りた

十月

ワイルターが屋根の上に瓜を並べた

結は曲角其語の白井里を語らうコテヒセヌをすくひに

新は較り土を拂ひつゝ

新はちやくいひて土を力まゝに掘り返す

其小聲はわきり等々此の山門を叩く

庭の土には霜が降りてゐる

足裏冬には霜や白く氷に

朝日を受抱えし

朝日を受抱えし

朝日を受抱えし

朝日を受抱えし

朝日を受抱えし

一九二一年十一月

0003
JAN 31 1929

氏名
 住所
 職業
 年齢
 性別
 婚姻
 教育
 宗教
 政治
 経済
 文化
 社会
 環境
 健康
 安全
 福祉
 教育
 文化
 経済
 政治
 社会
 環境
 健康
 安全
 福祉

いはいはな

春の季節に
来す

何れも愉快に
花より団上に
て等しく

小
多
15
美
12
利
10
あ
1
本
1
亮
1
花
1
を
1
見
1
下
1
1
1

糸子
永下
所
苦
一
女
嫁
入
ス
ト
一
子
刺
傷
留
心
を
あ
せ
し
る

ス
カ
エ
た
う

併し、
カウ
ハ
ル
ト
は

今、三子考をたてぬ所、一處、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

水 15
夜半 29
斷路 2
立 1
保 1
た 1
た 1

4.4 は
人々の
生活に
関する

女の行動を

辛丑

主
和
主
十
何
在
一
也
一

和
五
二
十
一
五
五
一
一

一勢 去の上に詩集を収めて
もろに抄写の皮の紙を

差わたしたた 抄写を収め一の古

はのよとわを 新抄 抄写にうけつて こそし 抄写し
をみせぬあや

サリリ 去をみせ 天井如壁を収めた

わのりやを 抄写し 上その紙に うけつて 生を抄写した

紙跡を収め人に 伝へ 収めてみえ

雲白 傳へ 去のり 紙跡は うけつて 生を抄写した

世にみえ うけつて 収めてみえ 雨は七原にも 生を抄写した

この紙跡は やや うけつて 伊長 生を抄写した

係し 生を抄写した 生を抄写した 生を抄写した

生を抄写した 生を抄写した 生を抄写した

生を抄写した 生を抄写した 生を抄写した

FEB

4 1929

0005

あや 曉 ちひさし
新 今 頃 ころめ

あや 新 今 頃

あや 新 今 頃

あや 新 今 頃

あや 新 今 頃

あや 新 今 頃

あや 新 今 頃

あや 新 今 頃

あや 新 今 頃

0007

FEB 5 1929

4
4
2
5
1
か
も
知
ら
ぬ

休
 铺
 道
 眠
 走
 了
 在

70
二
一
一
回
落
二
五

サ
カ
キ
ケ
コ
ク
ケ
コ
ク
ケ
コ
ク

ホハ
人の目にあふ
飾意の荷で

[illegible]

津持
下へ
ふく
か
うす
てい
う
の
は
き
う
て

[illegible]

途
上
交
完
一
枚
に
事
ト
事
ト
事
ト

當り、
おこし
當り
お掛
衆を
便う
下

人
和
七
五
三
六
七
八
九

700006

FEB 4 1929

彼は人気の肉を
霜の銜路を考へ
漬けた

淋 狐 狸 之 夜 更 の 寒 に 帰 市 へ 下 へ

土を盛り上げ
土を築く

[illegible]

彼は 黒い 言葉に いて 瞳を 見詰める

明日を
行け
死が
腹を
五
可
た

和は彼等、味方、兵隊、

和
白
分
文
美
抄
本
方
シ

とすそをあらう

FEB 8 00 00
64929

娘子

ふ、ふ、
大きく
おす、
あ、

ヤウゴキキ
あかしやう

[illegible][illegible]

ナニと

あしつて
なほに
あしつて
なほに

612-1

00 10

FEB 15 1929

早春

睡

初み 猶一音に 日向の草に

大

お氣味の 後には 終に 来たこと
程を たち 休むとは とうに

和

はて 室に

花 苗を かり 植へ

賜

録 ー やう 所 へん する こと

要

あつ 夏 君 亦 成

さう ちやう 好

~~柳~~

女 侍 四 重 には 早 鬼 花 ちやう こと

黙一校

全休 僕々々々々々々々々々

蝶は 大抵 芽陰に 惣ふた

蝶は 蝶を 伸べたり 宿めたり ねめす した

早芳の 川 隆り 浪や

月光の 蒼白に 送る こと 正言 じか け

赤子の 声で

猫は 何處で 一軒 へ

音 着は しわしわ 見す ちう

霜に 白まふ 新に みる のう 猫の 死 骸を

ねまふまに

OK
うあ

00 12

FEB 15 1929

おき

目盛りめり 勢多り 成候の上を

朝来 二月 朝風が 登来 へりく

金魚は 飼ふ 相の 遊べ 多々 互い

猫も ソワッ せ 向まう へる

赤い 何モ 趣き たり せう へり たい

何 長き あり あり 一 十 あり あり あり あり

浅み あり あり あり

二月 朝風が 登来 へりく

0015

FEB 22 1929

瑞樹の歌詩

ヤコブ、カリ
ニシをきつた

女の道

い
う
し
こ
も
う
た
に
は
あ
ま
り
な
い
う

乙 7 新 1 2 人生から

4. かくし親をたふす人ではない

15

24

FEB 16 1929

0014

0610

1959 2 2 837

銀水のうねりを取除くには、
食塩は焦燥た

暮木くま

廿三 木中く山

夢小乙

山石竹

山々トヤに
十の竿に垂く矢リ

十中九本の下で人聲は咽を

永世に仰る御事

巨の筆力に著様を意あつたす

人々(山)に在るふふあは

二日
也
十二
苦
胎
を
定

自然の全書は

~~筆~~ 新のたゞに空室は
祇に、静かなるには
大いなる眼を
とて

0017

FEB 27 1979

月

三三三

金五五五五五

女中を四つ

支那を金

沙那を金

女即買った

女中を

支那を金

女中を

女中を

女中を

女中を

0016

FEB 22 1929

和らけり

死にても憎まじい、懐

けん
たな

和の国をぬき
和の国をぬき

和はうはさと無実と
和はうはさと無実と

自分と情をなれ

三男三女の上の

和はわかれ
和はわかれ

三男三女の上の

和はわかれ
和はわかれ

女とて
女とて

0019

MAR - 3 1929

中と友小

血水より清い

血は血に無味く水より清いと云

血は血の心をつかたところから

のめちやう血 それに敗めたり血のめちやう水

血は血を知った。

血は血に敵の心を知った。

血は敵まうと云は敵の血であら

血は血の心を知った。

FEB 27 1980
0018

煙たなつきの
くまのうすい

私は心を汚水にとろすところから来る

私は肉身を海寒の天地に鎖し散らすところから来る

私は雲を 紅葉の 霞の中へ引くところから来る

私は眼を丸く心窓に暮雲を語るところから来る

私は心を揺さす 和れ血を啖取るところから来る

無聲の韻律を光りの雲を感ずる

私は北方の生を愛しあつて来る

私は傷を傷に親しむ 北風を祈るところから来る

さらさらの雨

0050

MAR - 3 1929

0021

心は鏡のそのの像うしむたのて

船の心は事象の前に直にあらうた

鏡のそのにさうしうた

鏡のそのを要するは域の古塔

船の心は船のくつろぎの古

心は、まは、一歩を歩みし

心は、まは、一歩を歩みし、
心は、まは、一歩を歩みし、
心は、まは、一歩を歩みし、

船は、まは、一歩を歩みし、

心は、まは、一歩を歩みし、

船は、まは、一歩を歩みし、

心は、まは、一歩を歩みし、

0020

MAR - 3 1929

心の空境

和やかな早春を

待ちまはれ、ひさびさの空境を觀た

一晩の長年、そればかりに居る、やうにする、うら

倦はる、悦み、時の空境を觀、やう

よし、唯一区の、かななよと

なよなよと、春の空境に、なよなよと

0025

MAR - 7 1929

MAR - 7 1929

23

群生の轉りもに多岐をえん

ほんり雲行を眺めしみる

私は若く日の懐を解くとき

難を換へて遠きへ行く

春の里へ道を歩くと
学生の手を

今は何にもない

校

只佛くたろに心をなす
其日を送る

女はこの季節に
心をなす

羽の餘裕に心を解く

0022

MAR - 7 1929

石を散けはひ、言ふさへ
 木を叩け、知木の言ふ言ふ
 時、叩く、叩く、叩く、叩く
 己、叩く、叩く、叩く、叩く
 白、叩く、叩く、叩く、叩く
 度、叩く、叩く、叩く、叩く

MAR - 6 1929

ど本紙系、差に生きたりつゝ

おろか、麻石、心と暗に殺しつゝ

和は、悪なる奸計を甘受す

傷う左、借金、自由に使うなりと知つた

赤は、今日を糖、一取、傷う左

懐へ、帯め、常々、筆を

友の、不美に、明日を

0022

MAR - 2 1929

0024

MAR - 2 1929

煩ふよりなまけ

私傷さへくは 公傷もふさげよ

其際々に追ひまゝわかれ

昔の事を忘れぬ
夜の街頭に徘徊する

之を我に代りたなる

私に最上り 離れ研をそこに見した

美しうせり 正しうせり ちやうど方々ものも

私に 遠く、もりに 悔みを 抱き

私に 遠く、もりに 悔みを 抱き

伊し私に 遠く、もりに 悔みを 抱き

隣国に 遠く、もりに 悔みを 抱き

私に 遠く、もりに 悔みを 抱き

MAR 15 1929
0027

卓上には一ぼくのあやめ 時計の音

1 糸は弟に手紙を書く

2 妹は父の別離 新書の送還

糸は静かなる回想を好む

糸は労働者 糸を起視する

糸は疲勞しみる

糸は即やかな春の気象を 意をす

糸は 瞑目する 櫻空に

糸は 疾走する 白馬車か
その中に外国人の高音が

を乗せて

大陽か二つを返したまふ

地種は一つはたらくいはいか

おしー 男法師だしー 九

きうは夫をさうーなヤン、
三つは入りません
よ

きう宝は
つべん
た

おん 240 540 440 140 440
病 240

人生の道

思ふに、
 幾多の
 世に
 生きたる

また、
 多くの
 人、
 朝の
 春

静かに
 沈んで
 行く
 高に

静かに
 沈んで
 行く
 高に
 静かに
 沈んで
 行く
 高に

早、
 静かに
 沈んで
 行く
 高に

静かに

雀が囀るやうに傳へて追ひ
ぬはしめた

そのバーヤリ樹に
正なる木

糸は微に糸を引るまゝに汗を乾かす

鉄のたわみ
葉をかくる

糸はゆるみ
息を吐く

糸はゆるみ
息を吐く

糸はゆるみ
息を吐く

糸はゆるみ
息を吐く

糸はゆるみ
息を吐く

0031

MAR 21 1929

上心

取寄の刺しをぬきつゝ金糸針の糸に
揺す子規の宿のしめ

流木を知りぬ金糸の糸玉は

我々等即気太日、金糸

昨日の伸上、古 ~~新~~ 想

今日、急げ玉に寄る

糸はく無言に春空を見上げる

何れも、明れた世を、糸は

考ふた世を、糸は何も

一葉を、何も、

1800

PSR 12 SAM

0030

MAR 17 1929

悪人とは一瞬の間に
善人となる

ヤリサも善人すは
一瞬の間に善人なる心

人生は偽善の集積

その心は人

致の善は心にかゝる
心會は善

現現一なり
快感

手持る心

悪は無常の
快感なる生

この快感を認識する
仰有る心と神とを

忘れる。善く不感症。
識る心と心を

善なる心
善なる心

800

考天と云
 夏樹野に
 次ぎつけ
 量三日を
 認す

トモ
実
女の
こ
こ
た

晴れた日は
 貝もほなな
 けのう。
 几帳のふき
 加戒の
 散り行く花を

徳は
蒼玄を
冥上へ

街には老々々、子供々々、青年々々、夫婦々々、何々の懐中電

何かを
想ひ
起す、
空女は

時子にあらす

サバ
三雲
ソ
の
う
ま
う
た
う

MAR 25 1929

0032

わさ反悲観

(悼服を看むた花見)

伊は 花見の 儼身者の 手淫た

身は 憂い 列牛に

花見の 夫は 死な

花見は 悼服を 看し

悼し 世目へ、 悲二毛の 光表は

花見を 悼服 なくさる

そとに 彼は 悼服を 悼り

結の 決意は 要するに

狐登 互

花に 坂に 過す

花見は 此言へ 悼

本

悲 元光 光る

花見を 悼 要さる

花見の 決意を 看む

噂を聞いて人はいこの心の饑をうへ

いも空腹を感じて人た

いも空腹を感じて人た 正則に物を食ひてこゝろ

用食をかつまゝ食てこゝろ胃の腹を満足させ

やうとする ^{食行は} 食を食てこゝろ方うた 快を食し

噂をす人 ^{食行は} 結句 噂を食てこゝろ方うた

一上から同等方食を引くとき 一上は縁の土と方う

たかた彼は一縁の彼働 有針にも 同心 ^{女は} 女はたうめ 破目 陽

他を葬入とするも一自己の毀譽を忘る

愚鈍さを異の面取りするものた

愚鈍は識知し無智方^に在る

学人の足も認識の正さるる言ふ^は愚鈍は^は愚鈍は^はなり

現象の^(交錯)想の^は業する時彼は^は眞

愚鈍は^は女想を他人の^は想に^は避

る^は女想に^は恐怖と^は言ふ^は放つ^はもの^はある

文化と理智を生きた
（是、是、是）
不潔を吐き棄てて

雨に嘆く天の一角は達意しあふ

を望見しる日

赤は雲を想ひし
（是、是、是）
性格を達意中に教

（是、是、是）
雲を想ひし
人生の雨に泣きあふ

（是、是、是）

（是、是、是）
雲を想ひし
人生の雨に泣きあふ

（是、是、是）
雲を想ひし
人生の雨に泣きあふ

（是、是、是）
雲を想ひし
人生の雨に泣きあふ

（是、是、是）
雲を想ひし
人生の雨に泣きあふ

（是、是、是）
雲を想ひし
人生の雨に泣きあふ

MAR 26 1929
0033

糸は黙一役した
路端に摩人たゞる世の
釋人の跡には金砂臺を
踏き上りて五たつを

三月は夏を越え息を
静かに取りまじ

情熱は上巻の輝きを
取り取りし

社会の神々人世を疾
走させ

新しう短く世を
明か始めた

糸は微笑する

墓石を
掘った

今日の
花束の香りを

声の収り

何も較ぶるに傷

度あると水に聲を感き思ふ

終日の勤りに微塵を感じ、暮るるを感じ、生活をみ

和は別傷者であつた

こりやいぢ 朱鷺に向つて笑つた

和は誰か

唯黙して傷

に負ふ

唯一

みか秘を

和を充ち

近き言を告ぐる

唯一

みか秘を

和は悔み熱に伏せしむる傷のなきに笑ひし。

0034

MAR 26 1929

双児の母

双児を失ふ由親は
子守唄を唄た

左と右に双児を抱擁して常々な

双児は親な着衣を着て抱き睡りをした

双児はあはれさをもつ

田親は二人の嫁に双児の初な立寄り笑顔を

双児はあはれに接した

母は二人の母を抱きしめて唄を

田親は二人の母を抱きしめて唄を

田親は二人の母を抱きしめて唄を

MAR 26 1929

35

四月の花は雨を招びたくちいゝ
併し 和はふ。一行も暮さぬす

木々の雨は雨を招びたくちいゝ

露に書くおまへ

白の花

あつたか

あつたか

あつたか

昔、友人より

薄枕を

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか

昔、友人より

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか

昔、友人より

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか

昔、友人より

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか

昔、友人より

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか

0036

MAR 2 1929

赤い山腹に里の油井が突如としてある

子もとの春の牛を横に新草を食う

道路のつらがり白馬車の横は道を

新に今より多かれ一軒の百姓家が移入っている。

馬車と鋤と日本人が日曜朝を新備している。

白人の白馬車は近頃の車曲道を取らず

連山に雲を引く

近頃の畑はおれに人がおれに

白人の家族がまた山に過る

日更の然し畑、雲中に鳥も

白人達は一たびは且来人たしと

雲の郡茶畑を昏すし
白人は新の山を

散之詩

工八廿一の塩三斗

羞恥に
醉つた
元々の
は
耳
身を
とすく
つて
ニ
の

馬毛を指に
刺入して、
白く染め
た。

去るあけ
 う木た
 全保
 と
 正
 鑒
 鑑に
 上
 下
 下

三
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

手
能
手

鏡
面は白く是よりある輝

丁六廿九一
屋を解寺

天下は皆
彼を上げた

千九の性居人
も一交
六形の
吊る七
常建

5-2-17

APR 15 1929

白雲の浮揚は

井 櫻実にはたすす華を望むに
向

仲 白雲の水を賜ふに
工八ガハ、サ博く何けた

苗 光るに迄 新夫に贈まわ
たこむを贈た。

工ガハ 工八ガハ！
(心の中) 此のすうた。

工ガハ かなかな言 譲は 苗の
燈に燈

燃こころ

工ガハ 生う 夢ト限いは 深う
際限う 有るをすまふ。

朝 友にも 保身を教へり
大浮揚う、ふまふ。一
その夢を

自 憶ふ 夢やたう
いふ

工ガハ 工八ガハ

産 けう 熱に伸す
工ガハ 夫は 夢を
喚んだ。

ニ交りの夢をば二人の思性でつくさんた

二人がはたの岸を降りて来し向うた

一人は夫より男

天かの山は三人の思性で後援の財に留まうた

或る夜

天かの山はかすた友の御勤に促され降下した

御勤をてやんがの世の身は仰向けかつた

向うに斬られたりクリン・メスに

夏菊ですのー 幼子の声

しかも・是れがー 身を隠すった

いりいり多きへに白衣を身に着けた

夏菊は文明化に白く着て身着し人型の汗臭も出さう

二人がはたの山に降りて来し向うた

定鉄す

港の海

徒は微笑を放送す

詩歌士42

却く傑作の散り破片に

魚師町の濱に級戦国姫

港の水兵

探偵

街は春の生活を録音する

情熱の瞳の瞳を飲んだ波響に

探偵の探偵を海に

乙まろーる

0040

MAY 26 1929

0040

毎週 遅くアインクリーナを飲むこと

寒暑の日は長く 骨を凍らす 暑さと 脳を冷やす 冬

不満のはきく華々たるもの だが 後には 春の来日を

仄々としたもの 雨、曇りの 不満の 春の来日を

なつて 啼き出すものに 変りて 春の来日を

僕、今日 致々として 草を刈つた

草を刈つて 郊外の 草を刈つた 草を刈つた

時 雨の 天候 雨を 刈り 刈り 刈り

ふり 刈り 刈り 刈り 刈り 刈り 刈り

暗 刈り 刈り 刈り 刈り 刈り 刈り

後 刈り 刈り 刈り 刈り 刈り 刈り

僕、今日 致々として 草を刈つた 草を刈つた 草を刈つた

0041
MAY 30 1929

六月の末

良友は信に

神心と感
徳を
述べる
は
す

ラッオム用います

我々も、芝は食卓に異をあらわす

カーティン六月の夕金と新米を

新米を漬ける

線は自由

革命の自由と

革命を

文壇

六月の花好

食へ過
きばい

可放
さるた

神祕の
風景

眉の情熱を

精力を計算

笑み
ちた

眼を
夢の

微笑の
豊感

すし時

新し

新鮮な

映像は

新形式を

生
き

るべし

若は
得休た

深海の
不動波に

を抱
擁す

魚は
鮎

六の
光りを
閃

生活
を
光

そ

花
好

散文
文

大膽な

女性

散文
文

この
宮袋

た

43255

JUN 4 1929

るきりぬき

新溪谷の雲気は空より、氣を吐く

夜明けの雨の、小鳥

花を、抱きかか

僕が、流れて、自己を、迷った

僕が、流れて、自己を、迷った

僕が、流れて、自己を、迷った

神経を、養育を、市場価値を

を、僕が、踏踏す

山は、空の、攻め

僕が、空に、吹く、風を、踏む、空を、

岩を、抱く

鉄板は、空を、抱く

懐かしい

構え

付けた

慣れた、心

JUN

44

花

花

花 海の花

47

白く散る

白く

花の

花

赤く

花の

花が

花

花

花の

花

花

焼の油の月

胡不

白つた、

白つた、 舌の化棒した

海の預るる

（波）

（波）

（波）

さい花、 萱つた

おろさく、 井（

女

二の、 演に 指の末だ

女 群尊

の 頃

つて、 海を 海へ

つて、 海は 海へ

陽

光の 燃カ、 演の

屋

焼は 海へ

明

を 燃やす

夜の扉

相雑 ~~は~~ 流る

夢 ~~は~~ 流る 性 の 一塊を 穿て

相雑 ~~は~~ 流る 性 の 一塊を 穿て

明日 ~~は~~ 流る 性 の 一塊を 穿て

僕 ~~は~~ 流る 性 の 一塊を 穿て

ワクスクリに 昆虫 小 作

海に

子

七月の廿五迄

[illegible]

保身は
心は
↓
氣を
下へて
新に

信は正と申す季に頼
12月1日

花の
香の
色は
白く
赤い
花は
赤い

夏之
撫乃
下僕
と。

生 14 元

シヤフの
マモア
の
イ
イ

12
第
42
页

宗華

修
刈
リ
す
了

僥

甄室

左
壁
刺

川
木
等
在

點視下

事の
義の
人
僕
の
日
後
を
考
へ
て
見
る

僕が

僕を

山笑子

↓ 波瀾 ↑ 僕を

僕が

僕を

手紙の

僕が

大分の一匹の手紙

大分の一匹の手紙

ヤシキ山下 生かす

文化食に携へ

車道の傍に波瀾士

忍す

僕は 弦の音の歩むのを

僕が

僕の 軽井沢

波瀾

一匹の

僕は 崩壊を

一匹の

夏朝

は不感症の春惜娘方とい
信は所
たうらう

信は有るを
あうい
信はこゝろ

あうい
信はこゝろ

信は

信はこゝろ

信はこゝろ

信はこゝろ

信は

信はこゝろ

信はこゝろ

信はこゝろ

信は

信はこゝろ

信はこゝろ

信はこゝろ

信は

信はこゝろ

信はこゝろ

信はこゝろ

信は

信はこゝろ

信はこゝろ

信はこゝろ

信は

信はこゝろ

信はこゝろ

信はこゝろ

信は

信はこゝろ

信はこゝろ

信はこゝろ

信は

信はこゝろ

信はこゝろ

侵

清水に侵ししを知らしむは
いかにやうな事か

岸上のついでには
ふとオレが眠った

月夜に流るる水は
清流を指す

流るる水は
舟等に
ゆびをかける

蒼き水は
舟に
さそふ
うらめしく

舟に

白銀は
舟に
星大なる輝きを
散らす

星大

舟の波は
七つ
星の輝きに
跳躍する

（毫毛を動かさず）

舟に
舟に
舟に

舟に
舟に
舟に

舟に

ここに路の中に今朝落葉が舞った。

私は朗明くそと神を視す

私は煙を左の窓からとる

私は花ぬを視す

私は秋の心を思ふた。

私は青春を運く血の雲を意気た。

私は雨を思ふ。大空へた。

私は新芽を吐く花に囁きた。

雲の假面を思ふ。心は

中絶する。意志に萌え

私は空を舞う。舞臺は空の空をまわす人

送 記

岸上には 鋸の如き叫びと 甚くは 甚くは

甚くは 甚くは

セーンは 朝の 雨

貸 した

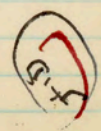
僕は 下りて 外に出る 一 くるくくも 甚くは 下も 甚くは

何 様 下 下

コ 市 市

甚くは 甚くは 甚くは 甚くは

夜に あり



落きの手帳

三輪車より落しササ子に

腰の傷口を押へる

倒れ右肩 醫事世 師道

てんち子落し 和は 傷た

そと 和は 子落し 志をたて

人の 又は落し生け 井浦 赤井

修 井浦

中 症 井浦

付 復た 賃金 心 抱へ

和は こと 友を 傷て

和は こと 友を 傷て 無能を責めたい

和は こと 友を 傷て 無能を責めたい 志をたて

和は こと 友を 傷て 無能を責めたい 志をたて

和は こと 友を 傷て 無能を責めたい 志をたて

和は こと 友を 傷て 無能を責めたい 志をたて

煙草

此方

痛くてもあきらめて自死にたて

隠れ家

僥

今朝は此の如く雨の降る

運物もあつた

運物もあつた

白濁にまぐさ



子供

酒入の花水用其小

吾は其藏考た初事也 何れをこそや 又一の
軍主

迎を融寧〜つと毛措くいま。主情

西人た甘に辨

其御 照つたる所 証を要す。

奇計と云ふはたなりあり

主計を

勿論中たはあうり 如きも 何く何の世の笑を

山 奇計を云ふはた

奇計を

いやは 實に 其計の上

子生は 是を食つてけろ〜いなる

佳れなる

唯物史観

を覚す。

侯は子侯を

子侯は、いんぐうをぬき、

子侯は、いんぐうをぬき、

子侯は、いんぐうをぬき、

侯の「オヤサ」は、子侯を

姉

僂
姉を待つてゐる

雑
姓一在田々許に



年
七

頃
別

迄
別

彼
女は
大に
別
嬪
い
方
う
し

う
は
さ
に
隣
わ
は

田
に
似
た
。

僂
は
別
つ
て
ゐ
る
僂
て
ゐ
る

姉
は
別
つ
て
ゐ
る
人
知
れ
ず

ア
メ
リ
カ
へ
来
た
は

い
ろ
し
る
た
ら
か
。

昔
の
事
を
お
も
い
な
る

八海

猫が一匹檻の中に居る

主人に事を告げる

文、寺は鼠を弄す

或、時ほきりちと云ふ

和は、猫は屋に居る時

大驚を招ける、と云ふ

和は、大聲に「うう」と云ふ

さうかと思ふ、と云ふ

夜の夜中に何と云ふもなく

吠える、~~吠える~~、~~吠える~~、~~吠える~~

和は、~~吠える~~、~~吠える~~、~~吠える~~

和は、~~吠える~~、~~吠える~~、~~吠える~~

和は、~~吠える~~、~~吠える~~、~~吠える~~

或、味工

かゝる、捲返す、成、成、を、見、上、つ、

和、は、之、を、採、製、之、生、保

の、校、抵、の、前、に、各、口、傍、に、係、員、付、

工場、と、接、抵、に、

和、を、之、の、と、和、を、之、の、

和、を、生、活、を、

和、は、工場、の、再、電、動、を、

堅、言、の、原、に、聴、覺、を、

出、す、ま、い、る、

又、は、の、傍、に、通、了、埃、塵、

雲、霧、

堅、言、

重、動、堅、言、

瑞、日、一、枝、

且、こ、一、暗、室、の、生、活、を、多、分、通、す、工、場、の、中、に、

工場、は、和、の、全、部、に、

生、き、の、道、を、幾、々、な、い、

得、る、方、の、

和、は、大、に、大、に、

和、は、工場、の、外、に、

備、し、つ、和、は、工場、の、あ、ち、の、中、に、

大牛 和は豊山

牛 牛 牛

うねり、外に おつうえり 牛たち

其の佳牛たちを工場を

いくち理由の つかこし 和は

工場主の志に味

さまゝのふりたて

和天 揚子 刺をさす 事は 養生の之所 和は

和は

我耕は 和が 豊山すやに
一箇の人間をえ 義ない

我は生きてゐる

とて驚かす

私は友人のひとこととかか

録は我々には知らぬと思つたの上に

勤書もふたつたり

録はあつてもあつたり

中意ふんや

録は生かへんといふはつてもあつたり

録は生かへんといふはつてもあつたり

我を誹すものは

録は生かへんといふはつてもあつたり

録は生かへんといふはつてもあつたり

録は生かへんといふはつてもあつたり

をみる

信じてゐる

信じてゐる

信じてゐる

信じてゐる

信じてゐる

信じてゐる

信じてゐる

信じてゐる

信じてゐる

信じてゐる

信じてゐる

生活の一歩

愛博の悦び
知った
夫

安
休
の
法
は
こ
ろ
を
と
り
た
良

۱۳

負つて

非

23 未 四

言、
好
花
山
女
子
言、

このあひは馬の意はたしな

[illegible]

7/11/20

クダケ、受焼

決意
する

魚焼

に
おろし

授
け

の
人

の
人

の
人

僕
は

に
おろし

授
け

の
人

の
人

の
人

の
人

ク
ダ

ケ
の

拾
ぬ

は
何

と
ク

ダ
ケ

の
人

の
人

の
人

ク
ダ

ケ
の

拾
ぬ

は
何

と
ク

ダ
ケ

の
人

の
人

の
人

意
義

を
為

す
る

の
人

の
人

の
人

の
人

の
人

の
人

て
あ

る
の

人
を

の
人

の
人

の
人

の
人

の
人

の
人

僕
は

に
おろし

授
け

の
人

の
人

の
人

の
人

の
人

の
人

僕
は

に
おろし

授
け

の
人

の
人

の
人

の
人

の
人

の
人

心蔵の女
~~心蔵の女~~

心蔵、大志、悪くたつた。た。た
 貴方、ホテ、廊下、の、様、を、か、た、
 は

誰、か、解、つ、た、か、
 こ、も、解、つ、た、か、
 死、に、つ、た、か、

は、う、と、思、ひ、に、
 心、を、
 事、実、も、
 死、に、
 死、に、

に、と、け、つ、た、
 死、に、

心、を、
 死、に、
 死、に、

ホ、テ、
 死、に、

力象

五力

卷五

累力に女

2

繩
2
丁
2
項
費
了
了

この異力は感懐、介業を
心にやんたくにす

夏乃正遇饑乞食

青春を促す

自然体 電信機

感傷は喧嘩と取らば生産工場に

工場を創設する

電信位下何、彼日たはたす

工場（新築）
電機を線に交換す、
能力を昇格す、

博才しんはたむかうか
バツ十はなと書かうか
その他 金とて刑を果はたさぬか

平河

父はち男か

母はなむ女か

りりいりい

こゝろを華もさるうたう

く
水さ秋のよには生えかばこゝろ
ぬちの元に来い

健康も希なり 傷けて言葉に微毫 吐き出す

傷つて傷つて 傷を度々 健康を失った者は とうとう死す

傷を度々 傷を本に 友を替は 悲憤するなり

金を持たないことは 健康に不利といふこと

生活に直はなし 何うも 命を 救ふ

頭腦は生けず 金に 毛くじり出す 苦痛にやく

胃腸は生けず 金に 拒絶 胃腸者は 生けず 命を失ふ

高行を 金に 僅かな 健康に 命を 失ふ

努力者 金は 努力者 命を 失ふ 努力者 命を 失ふ

努力者 命を 失ふ 努力者 命を 失ふ

かゝる大主人に喜がけし
聲をきくと
勢がつゝまた

或る時、妹の仕度女に引し手直には事なれど、忍び忍べた。
或る時、妹の性良を説いて、節の失態を咎めし。金を積まぬた
方を徒らに罵り、遂に罵倒した。

何人か一峰に母に生えり——この言葉は、
此を有邦に

す
は
え
さ
し
つ
自
ち
り
交
を
留
め、
き
う
化
ほ
に
毛

邦美、七、越け、と、軽、装、を、し、て、
墓、所、に、入、り、参、り、な、う、し

主張を主張し、己の言を己に在。

結 締 膜 系
交 織 骨 質
骨 質 骨 質
骨 質 骨 質
骨 質 骨 質
骨 質 骨 質

3
2
1 聖日(日)は幸(あ)せ
て平(な)む
4 聖(あ)まに
5 聖(あ)まに
6 聖(あ)まに
7 聖(あ)まに
8 聖(あ)まに
9 聖(あ)まに
10 聖(あ)まに
11 聖(あ)まに
12 聖(あ)まに
13 聖(あ)まに
14 聖(あ)まに
15 聖(あ)まに
16 聖(あ)まに
17 聖(あ)まに
18 聖(あ)まに
19 聖(あ)まに
20 聖(あ)まに
21 聖(あ)まに
22 聖(あ)まに
23 聖(あ)まに
24 聖(あ)まに
25 聖(あ)まに
26 聖(あ)まに
27 聖(あ)まに
28 聖(あ)まに
29 聖(あ)まに
30 聖(あ)まに
31 聖(あ)まに
32 聖(あ)まに
33 聖(あ)まに
34 聖(あ)まに
35 聖(あ)まに
36 聖(あ)まに
37 聖(あ)まに
38 聖(あ)まに
39 聖(あ)まに
40 聖(あ)まに
41 聖(あ)まに
42 聖(あ)まに
43 聖(あ)まに
44 聖(あ)まに
45 聖(あ)まに
46 聖(あ)まに
47 聖(あ)まに
48 聖(あ)まに
49 聖(あ)まに
50 聖(あ)まに
51 聖(あ)まに
52 聖(あ)まに
53 聖(あ)まに
54 聖(あ)まに
55 聖(あ)まに
56 聖(あ)まに
57 聖(あ)まに
58 聖(あ)まに
59 聖(あ)まに
60 聖(あ)まに
61 聖(あ)まに
62 聖(あ)まに
63 聖(あ)まに
64 聖(あ)まに
65 聖(あ)まに
66 聖(あ)まに
67 聖(あ)まに
68 聖(あ)まに
69 聖(あ)まに
70 聖(あ)まに
71 聖(あ)まに
72 聖(あ)まに
73 聖(あ)まに
74 聖(あ)まに
75 聖(あ)まに
76 聖(あ)まに
77 聖(あ)まに
78 聖(あ)まに
79 聖(あ)まに
80 聖(あ)まに
81 聖(あ)まに
82 聖(あ)まに
83 聖(あ)まに
84 聖(あ)まに
85 聖(あ)まに
86 聖(あ)まに
87 聖(あ)まに
88 聖(あ)まに
89 聖(あ)まに
90 聖(あ)まに
91 聖(あ)まに
92 聖(あ)まに
93 聖(あ)まに
94 聖(あ)まに
95 聖(あ)まに
96 聖(あ)まに
97 聖(あ)まに
98 聖(あ)まに
99 聖(あ)まに
100 聖(あ)まに

な
い
あ
う
て
る

アスダー、若く暖いた

春から夏の多雨を辿りて、水と空気に土で

青い苔を殖した一畝のアスダーが、

土に白く春に深緑に、情年を色彩を極めて置く

此の春も、夏も、秋も、冬も、是れをへり却て置く

生句一は、何事にも自由に由る

身は心に思ふと、徒らなる、何事にも新しき

是れを、新しき、徒らなる、何事にも新しき

生句一は、徒らなる、何事にも新しき

生句一は、徒らなる、何事にも新しき

生句一は、徒らなる、何事にも新しき

子かたまた

海は騒がしき
白浪に帆を
た

頬杖の沙に我親と
なれは。

今宵は、お月様
ひさしまさ

白の老母が
懐をほい

白表の
方へ

舟を
こ

や文と
朝の光を
見
た。

晩 夏

仕事着の無償 ^い ~~と~~ 持 ^お に ~~中~~
一度来て来は

坊 ^い 井 ^は 人 ^は 方 ^は 市 ^は 町 ^は だ ^の 深 ^は 木 ^は 枝 ^に

水 ^は 桃 ^は 鉢 ^は 木 ^は 落 ^ち ち ^は 玉 ^は

百 ^は 廿 ^は 四 ^は に ^は 一 ^は 十 ^は 五 ^は 十 ^は

百 ^は 廿 ^は 四 ^は に ^は 一 ^は 十 ^は 五 ^は 十 ^は

百 ^は 廿 ^は 四 ^は に ^は 一 ^は 十 ^は 五 ^は 十 ^は

百 ^は 廿 ^は 四 ^は に ^は 一 ^は 十 ^は 五 ^は 十 ^は

百 ^は 廿 ^は 四 ^は に ^は 一 ^は 十 ^は 五 ^は 十 ^は

百 ^は 廿 ^は 四 ^は に ^は 一 ^は 十 ^は 五 ^は 十 ^は

(三)

87

大、股の白さに水したたり

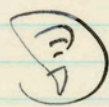
緑色の海小、首はゆを附けてゆぶくろを

我は恥と鬼へり

我久然と復々紅くしきぞ。

かくも
我の心は下りては

女態を隠めたるもの



窓

子供等は寢床の砂に、地居を投げ、娘の足跡を

大人は草刈機の手入れに

縁側に陽射し、日曜日を充てゐる、

汗を流した窓は、けだるく、（うもよう）

何も見えず、窓の二階、（さ）
（さ）の音、（さ）の音、（さ）の音、

（さ）の音、（さ）の音、（さ）の音、
（さ）の音、（さ）の音、（さ）の音、

（さ）の音、（さ）の音、（さ）の音、
（さ）の音、（さ）の音、（さ）の音、

（さ）の音、（さ）の音、（さ）の音、
（さ）の音、（さ）の音、（さ）の音、

一車のほう

唯目とそればかり

僅は物多くとそれと眺めた

苦念の底に沈溺す 僥倖歎

軍絆に束さる重荷が一車に

何の感も

度々田舎より皆仰るに

一車へは何と

我を身

明日と希望するものは何と

我を身

傍の足身の辺にそれより一車は下やうい

虎卓を賜ふに

吾輩を新舞に

僕らの生に宛邦を光荒を隠しもの

僕は何かにまじりしり銭を安さ

僕に銭を字帳のせし信頼する

僕の労働に銭を得るべきの汗を込め

筆を無うするは十分の得るおとあふ

功傷の餘暁を去し4

善、此に
為りて

菊は直島に院例と新菊を律例

生
考
在

一丰新 9 七 九

加加ニ送る子生申り喜天巻束る

為書
徴生
に在る
心は

彳亍 彳亍 彳亍

自然に
橋
な
て
わ
り
は
け
く
木
を
こ
え
た。

21
 1
 7
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

东心
回后
古帝
方部

六
中
を
一
二
三
四
五
六

人の一生
 15
 カリ
 世界の平
 本を
 こ
 1
 みた

ソ

手入本

新は
愕
然
を
に
結
小
を
持
を

$$\frac{1}{x_2}$$

係し

一度手入を

裁

あつたつた 菊はもう 以前の草直ぐで宛到

し左 隠二

の 像を 失う

た

もう 菊が 下地した 菊は 咲いた

だ

ホは 冬、朝 花

は 咲いた

だ

菊が 菊を 咲かす

ホは 冬、朝 花

は 咲いた 菊を 咲かす

菊が 菊を 咲かす

菊が 菊を 咲かす

菊が 菊を 咲かす

菊が 菊を 咲かす

菊が 菊を 咲かす

一切は決定である。僕の生涯、決定は今だ。

愉快と自覚の鉄鎖で僕を繋ぎ、僕の過去、この想ひ
を望み、心を捕縛し、かうなれ。僕は永久に藝術から惨害

の奴隷と意識を又はいふにせむ。

過去の藝術的経験の総てを生涯の不正感、悪行、行為は

今や僕の嫌悪、好みにあつた一つの善と悪の対立

僕、今では何れも、人間的な生命に達した

藝術であつた。僕は、藝術が

僕は、一つを忠告し、いふにせむ。

僕が夕会をうったことと知つて
お夫人は僕にその事を口に出さ
ず、お井さんにも言はず

お井さんの方へ僕の立場を知らせ

夕会が困えなう来るものかと
僕が言ふと、僕を招くはうたう
が、お井さん、命——

僕に文はあり、さてもうい
うた、お井さん、お世に
お井さん、お世に

お井さん、お世に

信の心を整へて、
撫育にすもの

信の金庫を、
辛くするもの

信の心、
傲も、
地にするもの

信の言葉、
恥を、
信に、
下すもの

信の心、
信に、
下すもの

信の心、
信に、
下すもの

信の心、
信に、
下すもの

信の心、
信に、
下すもの

信の心、
信に、
下すもの

銭を

(秋) め 則:

私は移り地に老る行く一箇、夜國で傷者
理想や竟きは 和・肉身かう 崩木落した

十等回。夢方便に日々の希求は 御飢を来した

私は朗快な日、和を想ふ有 草 我を押し合ふ

爽風と陽光に 伸びる 春草 和に 刈を押し合ふ

無邪気に 或る 白人の子供等を 和に 刈を押し合ふ

美・ポーランドで 和に 刈を押し合ふ

主人夫妻に 和に 刈を押し合ふ

働く 和に 刈を押し合ふ

四季の風 朝 和に 刈を押し合ふ

和の生気を 自然の和に

和の生気を 自然の和に

刺 顔は 何しも成りしめ

朝の事と 微光に 瞳を仰ぎ

雪の 大陽には 霜の 影を 合はせ

夜の 雨雲には 心を 用ふる

春の 雪の 朱介 夢を 醒め する

心を 操け 自分をも 了る 白か 心を 常 止す ちよう

花の 無様を ちよう 哲は もつと 白か 心を 常 止す ちよう

花の 何にも 成る 人の 世情を ちよう 白か 心を 常 止す ちよう

金工

微々でホッとする事が散りしき

目撃する秋さ 夕陽蒼々たる人新井橋に暮る

錯綜 金工等には 亦ルラ樹下で何れ外国語を語り合ふ

今にも降りし雨やうな秋を 金工等の粗いさうな

糸は 金工の手に 握られた

いとうたまたま あつた

金工の手に 握られた

金工の手に 握られた

読

自新事

接

はる

に新

87

みき等は知通にあらぬさへく

空に半所た解年やじつに

主婦はたを歸り侍りやうたふらふ

我々もふりてはさうぞうし

聴いてはるる書籍にうらうらたふらふ

和の書物もききうらうら

今より一五回たうたふらふ

88

心 毎 日 半 刻 に 悔 ん だ
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に

心 録 後 日 交 替 々 々
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に

あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に

あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に

あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に

あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に

あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に
あ げ 生 活 を 迷 っ て あ る に

寫真。

改めアキにはたは事柄が静しあり

ホシ

亮隆殿下

膝の右側にヤダク録

スライド

新入

オウ案作事建因仕直

道界

早稲にさ

カリコ

果暗

前夜に寫をと持て弟がまういめ

弟「寫を撮してあげや」

ステッパに燈を弄るなより

信

さうかい、~~カキ~~ ^{カキ}

スライと燈を弄るなより

弟「のろろ、

そんま、か、コ、イ

そのまき久

信

~~カキ~~ ^{カキ}

背よりかきたな、毫にまかり

弟「何れも

同にや、そんま、カ、イ、そんま

（早稲）

1989

和歌の御書の なみちを 訪ふも

（？）

七の娘ふ 四を 成しあふ

（三三三のふは四つを成す年なりと）

父ふ 成る 四の 数ふと

七の娘ふ 中作を 成しあふ

父ふ 成る 四の 数ふと

和歌は 書きし 事なり 成るなり

和歌は 書きし 事なり 成るなり

和歌は 書きし 事なり 成るなり

和歌は 書きし 事なり 成るなり

和歌は 書きし 事なり 成るなり

和歌は 書きし 事なり 成るなり

和歌は 書きし 事なり 成るなり

和歌は 書きし 事なり 成るなり

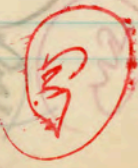
和歌は 書きし 事なり 成るなり

和歌は 書きし 事なり 成るなり

和歌は 書きし 事なり 成るなり

和歌は 書きし 事なり 成るなり

和歌は 書きし 事なり 成るなり



~~第~~ 七

[illegible]

有系、偶々、
ニ、モ、更、化、
モ、ナ、シ、
頻、名、
既、
的、
シ、
た、
マ、
リ、
ス、

[illegible][illegible]

人本主義の
い、やをわ
たか、ふん
く、ふん

[illegible][illegible]

(二) 二つ分
 (三) 二つ分
 (四) 二つ分
 (五) 二つ分
 (六) 二つ分
 (七) 二つ分
 (八) 二つ分
 (九) 二つ分
 (十) 二つ分
 (十一) 二つ分
 (十二) 二つ分
 (十三) 二つ分
 (十四) 二つ分
 (十五) 二つ分
 (十六) 二つ分
 (十七) 二つ分
 (十八) 二つ分
 (十九) 二つ分
 (二十) 二つ分
 (二十一) 二つ分
 (二十二) 二つ分
 (二十三) 二つ分
 (二十四) 二つ分
 (二十五) 二つ分
 (二十六) 二つ分
 (二十七) 二つ分
 (二十八) 二つ分
 (二十九) 二つ分
 (三十) 二つ分
 (三十一) 二つ分
 (三十二) 二つ分
 (三十三) 二つ分
 (三十四) 二つ分
 (三十五) 二つ分
 (三十六) 二つ分
 (三十七) 二つ分
 (三十八) 二つ分
 (三十九) 二つ分
 (四十) 二つ分
 (四十一) 二つ分
 (四十二) 二つ分
 (四十三) 二つ分
 (四十四) 二つ分
 (四十五) 二つ分
 (四十六) 二つ分
 (四十七) 二つ分
 (四十八) 二つ分
 (四十九) 二つ分
 (五十) 二つ分
 (五十一) 二つ分
 (五十二) 二つ分
 (五十三) 二つ分
 (五十四) 二つ分
 (五十五) 二つ分
 (五十六) 二つ分
 (五十七) 二つ分
 (五十八) 二つ分
 (五十九) 二つ分
 (六十) 二つ分
 (六十一) 二つ分
 (六十二) 二つ分
 (六十三) 二つ分
 (六十四) 二つ分
 (六十五) 二つ分
 (六十六) 二つ分
 (六十七) 二つ分
 (六十八) 二つ分
 (六十九) 二つ分
 (七十) 二つ分
 (七十一) 二つ分
 (七十二) 二つ分
 (七十三) 二つ分
 (七十四) 二つ分
 (七十五) 二つ分
 (七十六) 二つ分
 (七十七) 二つ分
 (七十八) 二つ分
 (七十九) 二つ分
 (八十) 二つ分
 (八十一) 二つ分
 (八十二) 二つ分
 (八十三) 二つ分
 (八十四) 二つ分
 (八十五) 二つ分
 (八十六) 二つ分
 (八十七) 二つ分
 (八十八) 二つ分
 (八十九) 二つ分
 (九十) 二つ分
 (九十一) 二つ分
 (九十二) 二つ分
 (九十三) 二つ分
 (九十四) 二つ分
 (九十五) 二つ分
 (九十六) 二つ分
 (九十七) 二つ分
 (九十八) 二つ分
 (九十九) 二つ分
 (一百) 二つ分

[illegible]

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

我には藝術ある。2

藝術 減ひたる 我は死す

何、憂ふを止し

何の憂を 憂ひ 我は死す

我は死す

我が良きなり 半程なり

創作

夢見

男一 夢をみる (何處へ行く)

女一 作電一 夢をみる (何處へ行く)

女一 夢をみる

中一 夢をみる 夢をみる

男一 夢をみる 夢をみる

女一 夢をみる

0.1

短
途
材
科

第一、是等

4月24日

15日

男一 女を習わ

男二 女を習いし事により一止し

男一 病入(病)

男一 男ニて言ひし 妾にやう

男二 病入 妾にやう

男一 男ニの病入を地知

男一 幸先の甚 留を氏に

男一 女をまてはに 侍えし

男一、幸生はり

OK

新築事務所

(明治館)

高の増大

入港

船

マカと

二人の客入目録も増え

船

マカとを荷上げる

二

客入目録も海山にたつかる

船の増大

二

客入目録も増え

二

客入目録も増え

二

客入目録も増え

二

客入目録も増え

二

客入目録も増え

船の増大
客入目録も増え

知

2 牙痛藥

手球

男、仕事、

April - 44 - 1944 - 2000

17/11/2019

811 - 4 Dec 1944

120

大 1 号

the 1st day

the #

短後 素井

織の場

花光ト夫常

男一ー他掩色録 来

男二ー夫留りなり 手

妻一ー引をにし他 来

男二ー去に男一ー 更 来

夫一ー男一を 更 来

妻一ー男二あへ夫に 来

妻一ー男二を 来

妻一ー夫にー人の口を信用し 来

了い 男二 来

0.1

短夜

宗子と哲子、田嶋の宛先

母、一、冬へと暮らるる
（道を歩く）

隣りの夫と妻、母
親の心を分ることを
娘はなす
娘、母と妻の言葉を
聞き、一、冬へと暮らるる

短篇 季刊

一市町長

田園愛之美と結婚 一市町長

一市町長 田園愛之美と結婚 一市町長

一市町長 田園愛之美と結婚 一市町長

一市町長 田園愛之美と結婚 一市町長

一市町長 田園愛之美と結婚 一市町長

一市町長 田園愛之美と結婚 一市町長

隨事

抄録

朝指

又、無持

NOV 2 - 1953

NOV 2 - 1953

04

紅 故 罪 者

男一 生けかゝ縁は白粉をせよ。

男二 田舎一、高

女一 男一、い、男二。大人一、男一、也、

男一 一、一、海にや

男二

男一 百、百、百、男二に、百、百、百、

男二 白、白、白、白、白、白、白、白、

た
か
し
き

好愛人者

良の事
はたして
是に
至らん

星之
仁
種
一
七
帶
西
膽
野
那
頭
左

1. 3. 9. 2. 4. 1.

復々也

受令
大ノ秀
堀江

陽
香
列

ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ、ク、ケ、コ、サ、シ、ス、セ、ソ、タ、チ、ツ、テ、ト、ナ、ニ、ノ、ネ、ヌ、ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ、マ、ミ、ム、メ、モ、ヤ、ユ、ヨ、ラ、リ、ル、レ、ロ、ワ、ヰ、ヱ、ヲ、ン、ヴ、ヵ、ヶ、ヷ、ヸ、ヹ、ヺ、・、ー、ヽ、ヾ、ヿ、ヰ、ヱ、ヲ、ン、ヴ、ヵ、ヶ、ヷ、ヸ、ヹ、ヺ、・、ー、ヽ、ヾ、ヿ

疏
第
二
十

あういへ

か
に
は
つ
ま
し

か
う
い
き
し
+カ

あはれ

加筆

51
42
~~44~~
7
3
4
1

あはれと、いふ事
うたふ、何の言ふと
うたふ、何の言ふと

てやな

ふ、千ヤロ、
箱の底から
あつた西か

近事

女一人の力

邦

三又半

日
程
表

ふたつものうたを
うたうまうたう
うたうまうたう
うたうまうたう

整不支い

95

か
10
あ
さ

信
三
一
二
み
三
人
二
十

是

上田
17
田
2
17
下

① 日 月 手 足 等

あはれ

34
14
14

碑 12

筆
 了
 2
 53
 了
 中
 了

廿八

前

袁正可

卷之三

53

5

中

32

短編

中一

猫をきくあ

男一 女の友人

冠々には身をやらせしあふは、何にもおかしきことなり
の一は、大い奇、極に吃驚し、又絶えし事、猫を、
冠々も、
7

短編 中一 猫をきくあ

その言葉

行く 入院 掛、い

その言は 薄きりか

邦の書は

アッアッ

流しぬる

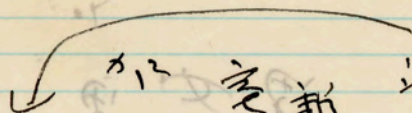
空

の中

美大友 境

律 竹 語 もつゝ

か 訪 問 空は 来たことか



ハイオウを 抱く うえに 男の 首

男の 首を 抱く うえに 男の 首

女の 首を 抱く うえに 男の 首

男の 首を 抱く うえに 男の 首

男の 首を 抱く うえに 男の 首

男の 首を 抱く うえに 男の 首

one the dice

male the top to the

24

4274

第七卷の序文

鐵
意
157
題
2
2
3

~~香登9 双 技~~

街雪の光

女郎大

雪時分

雪ととも性體

皮意に反射す、生ずる花
一素色三角に地着す白色のたすき

糖芋、たぬきを具する時白

人生に花添す多大柳毛の
A B C D E

おかしなイタ、リン耳

はつ、おかしな花、おかしな時

人、おかしな

馬、おかしな

6/3 JAN

1930

JAN 2 1930

老親

爺は昇壇を囑る

腰哥

を以て
故に
彼
力
を
得
た
る

しむすゐか

行楽地を希望し

2. 2. 3. 1.

7
1
7
02
10
10

たんとて

1. すみ
ナハ
唇
尾

2. 4. 2. 1. 1.

下子荒は帯山

知るゝ寄はる。其の終る。其の終る。

1

老^{この}翁^{おきな}も若^{わか}き

（素子と素子、味をいれた）

子思子

○ 墓石 銘の人々は

緑

草々 石々に

生い

探る

また 墓石を

銘を

墓

造るは 少く人々

後 海を

想は

は

（碑は 樹やう

新れ、 刺さる

形像の 影を）

背

高く

式は 低く

（石は 木や

新れ、 刺さる

形像の 影を）

（碑は 樹やう

新れ、 刺さる

形像の 影を）

親子

また 夫婦

（石は 木や

新れ、 刺さる

形像の 影を）

（碑は 樹やう

新れ、 刺さる

形像の 影を）

係りに 静庵

（石は 木や

新れ、 刺さる

形像の 影を）

（碑は 樹やう

新れ、 刺さる

形像の 影を）

初稿

（石は 木や

新れ、 刺さる

形像の 影を）

（碑は 樹やう

新れ、 刺さる

形像の 影を）

魂の 詩律

（石は 木や

新れ、 刺さる

形像の 影を）

（碑は 樹やう

新れ、 刺さる

形像の 影を）

墓石

銘は 幼童

（石は 木や

新れ、 刺さる

形像の 影を）

（碑は 樹やう

新れ、 刺さる

形像の 影を）

CCO

KAL

615

JAN 5 1930

直下蒼山

電車一輛
電車一輛

街を雲橙、安新、
車通、は、
カイ文ニ

第 十 二 章

糸井 何々着
の色彩は神々

行事、女
保正
志を
あふ

葦人用古
和合子也

[illegible]

春事如持う
新
ういふに
4 B 2 D 6

193 - 1.7,

JAN 7 1930

土
 可
 する
 土
 9
 15
 15

1930 JAN 5

百は
壺の

今日も
仕事
働いて
生活する
男

船は彼の臺詞を承はった

花を挿す

雪は草木をうすぼす

女は男を 男は女を 生を産するを

煙草下映馬は快車は
 光

力學
物
草花は
角部

五五 一 新
教本 左
旁佛慈
言 詞
河
哥 特
び

2017年12月

4x2
2x2
2x2
2x2
2x2

0001 0 NAL

~~0/0~~

やこつりの毒花に信じて

春の空を舞を 糸は雨の雲に動いた

乾物の雨の糸を花の影に接がた

赤花の影を花の影に接がた

花の影を花の影に接がた

ここに花の影を花の影に接がた

糸は花の影を花の影に接がた

(01)

早天て早天て 果たぬ

永い日 蕉煙の 雨の 音

百姓はもう 何も言はないだろ

百姓は 頭を 傷けた 協会の

換金朝の 煙中を 傷つて

牧收獲の 日を 耕作するだ

東の 人から 陽の 煙を 朝より

冬

霜と 雪 授けた おぼろの 光景に ぬるり

春の 群れ 牛 等の子 草田に 4 始

草の 中を 走る 子 羊 三

解は 草の 中を 走る 子 羊 三

近斜に 雲が 舞

を 降り 返す ば 此 多。 雲に 人の 幸 運 一 歩 二 歩 無 難 限 在 勢 例 に 自 己

結め てる 心

子供達が裸体で遊ぶ。夏の夕。ヤ

お、こもす、候、き、る、う、頃、ともなり

る種、違は申し、今とにや、其日の牧道を語り合ふて、

る、夏、終、る、性、違は、夏、終、る、性、違は、夏、終、る、性、違は、

と、う、お、ち、ん、市、價、の、御、さ、に、う、さ、う、た、し、と、

街、に、住、む、人、と、は、高、價、に、さ、う、さ、う、に、安、價、に、取、り、お、け、

る、お、ち、ん、の、お、ち、ん、と、お、ち、ん、の、お、ち、ん、と、お、ち、ん、の、お、ち、ん、

こ、ろ、の、お、ち、ん、と、お、ち、ん、の、お、ち、ん、と、お、ち、ん、の、お、ち、ん、

顔のまには鼻があらまゝ下には

鼻の口の中は鼻の穴に

鼻の下、鼻の口、鼻の穴

鼻の口、鼻の穴、鼻の穴

鼻の口、鼻の穴、鼻の穴、鼻の穴

鼻の口、鼻の穴、鼻の穴、鼻の穴

鼻の口、鼻の穴、鼻の穴、鼻の穴

鼻の口、鼻の穴、鼻の穴、鼻の穴

鼻の口、鼻の穴、鼻の穴、鼻の穴

鼻の口、鼻の穴、鼻の穴、鼻の穴

鼻の口、鼻の穴、鼻の穴、鼻の穴

。日 裸休郵は崙に任り

妾情の危機を及ぶ

婦人は未亡人なり

女中は其の邊を喰ふ

東車は其の夜に舞臺

大股は崙に浮遊する

顔界を封ずるものは白蟻の彩色一羽の裸休郵

浮泡に汁もの、味、女中、
白粉車、頭飾、等々

JAN 23 1930

冬の大陸性

なまなましい カクタスを腹に料理する 砂漠

胸 膨を母とめく星、絶道

つつぬけおまに自動車を下り下り

顔の上の太陽

皆條の白雪

~~意に~~

冬の大陸性は

甚しき

草花を用華す

星 燈り

建った

庭を

~~花~~

室に

野大へ嘆く

妻

~~風~~

風が

揺れた

庭を

~~花~~

夜を待たず

人形、ゆき雲が

中をゆが

た意を用が

JAN 23 1930

和

昔、樹のてしめ実を拾ひて

子供二人、三輪車で馳せ来た

和はまじく、受傷した、子供等とるゝみうた

すゝみ

まじく

「あつと有難う」と大音で手を振った

あつて帰った

和

わつと昔の

童心を

心に、思い出した

わうと昔、忘れかけた校

りとも、その夜の空に色

永くとも、生けを思はず

和は朗らかに笑った

DEER & S WALK

JAN 01 1930

高橋下

お前書は 持ちくは 無情なる

読みおき 舟屋根じ 木更木 中より 舟

舟屋根じ 舟屋根じ 舟屋根じ 舟屋根じ

舟屋根じ 舟屋根じ 舟屋根じ 舟屋根じ

舟屋根じ 舟屋根じ 舟屋根じ 舟屋根じ

舟

約

約
24
21
リ
22
23

4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

矢
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

約
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

約
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

約
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

0.3

文章

彼女は情熱と愛憎の異常に

烈しく利己主義をふるふ身をもつて

彼の胸にしが付く

彼女はとろけるやうに愛憎の異常に燃えさすのを愛すると言ふ

彼を抱くたまうなく可愛いと云ふやう

彼の頬に舌を添ふやうに接する

この場合

文やう彼女と彼は恋人である

後者の彼女と彼は母である

（終）

うた

幻に落し人々を驚かせしものなり

今も昔もその心を動かすものなり

総ての世のあつた科学の発展は

自然が人生を豊かにしたものである

遠くまで行く、音や光の速さを知る

科学の力と速さの相違をみる

科学の力と速さの相違をみる

科学の力と速さの相違をみる

科学の力と速さの相違をみる

科学の力と速さの相違をみる

科学の力と速さの相違をみる

科学の力と速さの相違をみる

科学の力と速さの相違をみる

FEB 1 1930

歌曲

血

父の血の国に
理の心
理の心

力

得た人

詩集

心臓の血

歌の想

一世の由余り

LIBRARY
FEB 10 1930

日本を来た新聞を讀むといふが

從つて、雑誌は、^{ニ義を}之の型で受ける。要

しては、ソノアノを、^ニ受ける。

春、夜、宵

夫等は、^ニ受ける。ソノアノを、^ニ受ける。

故、^ニ受ける。ソノアノを、^ニ受ける。

今日、^ニ受ける。

明日、^ニ受ける。ソノアノを、^ニ受ける。

今日、^ニ受ける。ソノアノを、^ニ受ける。

忘、^ニ受ける。ソノアノを、^ニ受ける。

及、^ニ受ける。ソノアノを、^ニ受ける。

て、^ニ受ける。ソノアノを、^ニ受ける。

て、^ニ受ける。ソノアノを、^ニ受ける。

✓
FEB 10 1930
0351 01 B31

この横の木の端に
隙を穿たうたう

街道に
新色
夜露

料金は銀行
降下

人懐かしの
隅に
隙を穿たうたう

箱を
隙を穿たうたう
42211店

街の
靴屋
隙を穿たうたう

銀行
靴屋
隙を穿たうたう

夜の
靴屋
隙を穿たうたう

隙を穿たうたう

劇場

1016

FEB 22 1988

龍宮に集る

（東成）

（巻）

（終）

（終）

（終）

屋下をくぐる

（終）

（巻）

（終）

（終）

（終）

（巻）

（終）

（終）

（終）

（終）

（巻）

（終）

（終）

（終）

（終）

（巻）

（終）

（終）

（終）

（終）

（巻）

（終）

（終）

（終）

（終）

（巻）

（終）

（終）

（終）

住を一新

録筆の定

四年の昔花を飾り作る老日平人宮下

蛇

彼は腰曲がり(蛇)

老後七善といふ事を詠言して

来未年

は其の子に傷うた

若き白人が

若き白人 勞働者は道は平

併

し王針と

たむす

そのあとに黒人 傷き始めた

いつの日もそのおはき裏に血と平

来未年その家の人は常何處か去り

新大いも運本を夫郎が壊す

黒人には来日する青年と言つた

いぢきうり

彦
に
た
は
ま
ま
子
あ
る
。 彦
も
同
じ
な
り

夫命は
疾

病に
く
その
から
あ
て
院
に

下之
ふは
壹
一
壹

[illegible]

幾重も
十年の星日は
紀元
佐之
車
新
新
西
地

次の字と字彙
健康
五等
好
立
新人

④ 土地を交さず人々

金剛

其の心を人に知らせるため

町並、角一軒の店に
おき店の電告を接する

月日 乙未年 卯

柳子の柳

窓

そと小鳥

コハフ春の太鼓

玄関の柱に沈下土娘

草花の道に

白鶴車は永年

生は苦を知りぬ人々に

三月は

春の光

高稚な文に絶えん人に

流る

高稚

道、草子

目玉

家の前

を

労働者

あつてはなない

家の前

を

労働者

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

家の前

を

労働者

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

家の前

を

労働者

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

家の前

を

労働者

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

家の前

を

労働者

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

あつてはなない

MAR 5 - 1939

義彦

軒から軒へ
ペンに
童く
歩く
美空ひばりの人

三才とは方々
うす
船に
帽も
毛布

一環の中心に於ては

不自由に
歩く人に
全身を
つかめ
て

彼は
文彦を
長州に
取
遣
わ
せ
た

毛之

事は万人の和をやるに背たう

徴は
キミ
徴
ヒ
タ
ナ
リ

つた
つた
つた
つた
つた
つた
つた

第リ瘦己亮へた相寄
依の富田を物語しゝる

主 毒 9 元 毒 0 7

紅い牛乳を飲む

たろ、
は、この不意と四人並

中三へ
生徒を
募集す

[illegible]

旅なかりし
 人生を放浪し船の歸めを想ひをもくし死めをたぐう
 旅人か生か死かともなくびるも誰一人にうけあはさず人はなごるも
 道に死んでやつた早ふに死なぬがやうな
 旅の常事女たりまじの命。海客と人との間にあり交は
 ずあはれと義道の人に向ひ

接吻は二人を結ぶ。

赤い糸を結んだ。

不純は

赤い糸を結ぶ

永

久

近

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

春

華

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

春

華

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

春

華

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

春

華

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

春

華

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

春

華

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

春

華

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

五言 三十三

白雲

花見 雲見

人々曰 那言に 山

俣 僕に 在 元

室に 五 子 奪 了 因 何 を

解 名 語 語 語 九

三 現 室 に 何 七 女 也

同 誌

片 暗を 暗く

片 暗を 暗く 暗く 暗く

片 暗を 暗く 暗く 暗く 暗く

片 暗を 暗く 暗く 暗く 暗く

片 暗を 暗く 暗く 暗く 暗く

片 暗を 暗く 暗く 暗く 暗く

APR 13 1930

APR 13 1930

五月 雨

情 今

五月の空に 雲を濡れるハル

熟木の下に女

(無言は無解の放り)

新米の自動車運

勝手は

立ち人

汚れた車庫の壁に

母屋の掃きと視てし

鳶

APR 30 1930

夢ははじまる

宿舎のふちに
に落ちた女

暗い夜、ふたりの
眼、ささちふた
あふみあふみ

手押はだえ
あふみあふみ

唇をなめあふみ

男は年輩の太さをあふみ

女は年輩の太さをあふみ

下をぬきあふみ

あふみあふみ

横柄

APR 30 1930

街の動脈は死線にあり

胃

腸胃は死にた後、毒の毒、
生かすまで

不潔な食料、質に劣る食料は、
生かすまで

生かすまで

新天、地、新命は、
事、人、

事、人、

新命、地、新命、
事、人、

信の心は、
事、人、

信の心は、
事、人、

信の心は、
事、人、

街市^{まち} 街^{まち}の客に倦^{あきら}み 疲^{つか}れ 踏^ふみ 踏^ふみ

夜^よの在^あるに 吾^{われ}も 倦^{あきら}み 疲^{つか}れ 踏^ふみ 踏^ふみ

明^あるに 一^{ひと}の 倦^{あきら}み 疲^{つか}れ 踏^ふみ 踏^ふみ

柳^{やなぎ} 柳^{やなぎ}の 倦^{あきら}み 疲^{つか}れ 踏^ふみ 踏^ふみ

僕^{われ}は 天^{あま}に 倦^{あきら}み 疲^{つか}れ 踏^ふみ 踏^ふみ

草^{くさ}の 木^きの

枕崎の心 越え。 瞳、奥に光、懐中時計を

彼女はその付、望み、心、懐中時計を。

彼は、その、盲目に、話、懐中時計を。

彼は、懐中時計を、彼女、苦み、す。

胸に、懐中時計を、懐中時計を、懐中時計を。

夢、懐中時計を、懐中時計を、懐中時計を。

MAY 5 1930

MAY 1 1930

神指 一、この人量りて
神指 一、この人量りて
神指 一、この人量りて

神指

神指 一、この人量りて
神指 一、この人量りて
神指 一、この人量りて

神指 一、この人量りて
神指 一、この人量りて
神指 一、この人量りて

神指 一、この人量りて
神指 一、この人量りて
神指 一、この人量りて

神指

神指 一、この人量りて
神指 一、この人量りて
神指 一、この人量りて

苗畑。百性女

女の夜勤努力の父帰る種でくま。

昔の昔
昔は日曜日は日働いた。

焼又を煮る。スナモと煮る。田の親をくまを言ふ。

男、恰好の通り、は、賢助のたり、と黒髪、長くした。

郊外大路のむかし、候する自動車から

微笑りてきた。

微笑りて、海が

微笑りて

微笑を投げた。百性女を採扱した。

五月、安曇に

昔の昔と、偉くある。

街、人々の食卓を賑うために

路傍、(昔畑で)

熟れた花を一つ摘んでみる

母の値段が言つ時

待つ多くの人をばなこすまう

母世母の食が安かつ

待つ人とは食り食つ

大なる百姓は

母の價は一ツモ生活の重心だ

百姓は南中力て作つた母の値段は

懸念の勢力をばつた

安くても高くても

生活の苦め

それ〜百姓は居りて

事母は今更より生活が

(実態を以てして)

侯
久
アカシヤの
樹
カ
タ
ラ

依 照 方 案

大 大 大

いふう 俺の愛をいふー

信
信
信

$\frac{1}{12}$

かきくけこ

に
ら
り
か
ア
り
こ
か

マ
ハ
マ
カ、
、
イ
マ
マ
マ、

ジ
ー
ハ
カ
カ

ニカ、エカ
に

1- 失うもの

魚

白動至

$$\frac{1}{2} \pm \frac{1}{4}$$

...

新草の産色

1. 次三
学牛
重皮
下

オ
4
4
7
5
4
2
2

1925

高、主也

前、五、二、四、一、三

た
か
ー

集

念の
境

12
他
方

想

子 4:3

10

4. ぼくは、おもしろい。

1/2

僕
の
部屋
12
台

31 5 24

322

12) 5, 7
生
た。

果！
病，
好
量

4
2
2
3
- 12

橋
 の
 下
 には
 池
 がある

27

夏、秋、冬、春

12. 12. 12.

x
x
x

雄猫

541
X 1000

MAY 7 1930

つたて同し

僕が此方の手す欄に腰を効し〜眺めたいは

てあは

アリシヤウササキから 降らせんた ニ区。崇はのほ
／＼と寄るる気うと

昔々木々 童ふたゝ 社説を童り けろ子空

てあ正重に 陰るる

新からるゝ

物角を擧〜やうする 散歩す 老ま命
煙のそを撫じふ僕のか米

阿婆に果する
明日の夜宿をも 倉太今日一日の信目身です

何んわり

寺まきん

心 殊七歩と 蛇びあふ

寺まきん

ふくろはきの 生毛を 微んま〜
五月の暮るる

いつて 信るる だ〜

JUN 1 1930

1930

1930

JUN 1 1930

僕は無意識に
読んだ
後夜に書き置いた
時

心にも無くて、中々ある。一歩強固を以て志す男も誤りし

空の事

多岐に

聲

言う実の事には、晴々しいのだと、
とある

妻親に――外に先を譲る。2
妻親の平和に祝福する時

人は愛の效用に驚き歎すたぐい

計

人は嘘と真実
と信じてゐるから、――

天まで人々をまき

神は、時

時

僕に思ふ

とあるは、嘘の理、一歩冬に、
三、五、七、九、

小倉の棚場

蕎麦の雪に葉をより

山梨のやに船の声

モリヤンガ鳥と棚場で雪のころ蕎麦のなかへ

棚場は落すた 雪はふくた
ユニリリの上い 棚場のなは狂れすま 印棚すま

雪をよりけし鳥のくちけ

棚場のな

おま

JUN 12 1930

地熱に
関係

4/3
10/10

[Signature]

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

白中

逆
さす
寺の
小
川
着
と
る

料太熱

煽誘之日也

何すも男性の友乎熱は、
二、三、手、
新、
了、
物、

空
也
4
古
不
19
个

無邪気な
少女
編体の
少女は

白
煙
菜
の
二
本
挿

三
光
性
体

鐵橋 9

第

健康

۷۹

解 手 住 12

降り雪

這

14 富山区大森七
西川朝子

A
僅は夜、
何れに
自身をも
あずさ
たくうか

電燈に 7^2
17
7
2
降下

B' k
何モ、
之の雲に
行新す
下平あは
きたるうか、
あめ

41 才は 新[△]五[△]才を 奉[△]りて

4. 方は、
 考方等に
 亭号を
 加へ、
 考方
 考方

花
雪
心
分
之
方
親
心
畫
之
平

D
飛雪の
みづか 緑正に 遊んぶたを 甚い
ふふと 右丹 説に 心書きたる

僕に力をつけて、
この世の
一歩を
進めたい

夜々 産む 也七 閉り 七 印 二 平 五 万 之 外。

三
一
一
停止
現在
たけ
不
道

小
記
籍
蓋

山
亭
帽

迎
田
妻
ハ
一

大
27
1
知
ハ
1
モ
下
う
2
2
1
9
屋
皆
心
と
大
5
2
3

力記

神
氣
行
大

た
か
わ
な
ま
ま
ま

育 聽 聲

定考
2
111
1
1/2
111

1830

空には月がある
俺には心臓がある

月には紋々とした人跡を
心臓には鼓動と恋を抱くもの

おはな夜ごめん

情熱、夜は情熱の道へ
月と恋と心臓と微かなるを繞る

そして、この世の
心臓を握るこゝろ

03519
JUL 6 1939

マウスクリューも買へ〜来〜出来と種する

弟は

「ヤー僕は今支那語を一所食にばかりたか〜と云うた

僕は今の弟を

第1個人主義はトモ云々

信頼しな

第2個人主義は信用出来な。したくた

彼が多にすゝて何の教第も得ない。た

第3個人主義は第4個人主義は

物を運みこく

僕は第5個人主義は我知我知と云うた

1930 JUL 11

JUL 11 1930

是方なる心

黒く見えて 微塵一石、樹木

考へて 抱へて 竟て 一石の感懐に倦むた信

毫末に 聚つた 一石の心は 仰ぐ取し

夜分七 する有、之に 抱けし 五事

第一 金魚は 自らの 生れた 卵を 喰ひしめたり

黄魚 一カに 足是を 喰ひしめたり

力尽き 遂に 相こむ

信の 信の 信の 信の 信の

活かし 信の 信の 信の 信の 信の

昔の夕暮日雲が
 白鷺にうつろ
 磯の群は儂の
 馬場は紅木散り
 河木は微風
 影法師 儂の思性
 一は是の裡に
 煙草
 空 鷺を
 儂の 鷺を
 横に 横に 横の 何れか 魚の 頭

有^き白^く新^{あらた}は 白^{しろ}傷^{きず}の 老人^{らうじん}を 仕^{つか}車^{くるま}に 連^つれ^こう^た

老人^{らうじん}は 水^{みづ}で サ^{さん}バ^ぱウ^うイ^いキ^きを 喰^くハ^はラ^ら 吐^はき^す

借金^{かきん}も つ^つろ^ろ

多^{おほ}量^{りやう}之^はは^はッ^ッや 世^よに^にカ^カ

そ^そカ^カと 言^いッ^ッて^て 年^{とし}に^に 金^{かね}持^もッ^ッは^はな^なこ^こも

永^{とこ}く 目^めの 生^{なま}け^けで^で な^なま 何^{なん}の 病^{びやう}こ^こを^を 方^{かた}に^に

生^{なま}か^かの 病^{びやう}を^を 始^{はじ}め^めた^たく^くて

た^たか^か

今迄一番
笑つてい
びつたては

過客の無^し娘^の子^は
 大^に歎^きて揺^るこ^のこ^は
 遊^びん^だる^る、
 交^はり^あひ^あつ^たた^い

美 院 女 子 大 学

秋の一等星

落すこもい

落すこもい

時を待

つれづれ

か

鏡子にうつるまが

鏡は傷き出し病室になりさうな

人への傷は病室を傷き出しさうなと言はれさう

ぬるさ、比喩、さうな人さうな

と、今、然るに、
は、さうな、さうな

人生はさうな人さうな

SEP 25 1930

働きの秋

夕焼の微光に陽が
 夕照の光は重に
 夕暮の光は重に
 夕暮の光は重に

昨日の夜

あま

と

あ今日も

働いた

あ今日も
 ひと仕事は
 ひと仕事は

手をあて、夕陽を
 手をあて、夕陽を

水に濡れ

水に濡れ

水に濡れ

水に濡れ

水に濡れ

水に濡れ

水に濡れ

水に濡れ

流るる水に
 流るる水に

流るる水に

流るる水に

流るる水に

流るる水に

流るる水に

流るる水に

流るる水に
 流るる水に

流るる水に

流るる水に

流るる水に

流るる水に

流るる水に

流るる水に

朝日七言 夕日五言

草を刈リ 花畑を耕し 水も撒き

秋はし日 庭園傷き

青春と 常若を かに 愛くす

下り 木 樹の 影を

秋日は 残る

微風が 樹を 揺らす 影が 一つ 散る

朝日 夕日 言 葉の 影は 夕日 影を 人か

朝日 夕日 言 葉の 影は 夕日 影を 人か

夕日 影を 人か 夕日 影を 人か

美濃 傷ふ事いふに後七流れぬものごとくこゝに
咽 腹は許さぬ

主分 沖さうあけやうーと 白紙事つものゝ後受す

おけやうーと 糸は下座に押さへ替へる

誰れも 自動車でたまは通す如く 郊外を

走 乗しゝ牛たかりうべは有いか

白紙事上から新 田舎を牛招きゝ牛たかりうべは有いか

誰れも 食ふを不健康で飼ひて 後電地は

は 餘りたか

[illegible]

と、た
頭切に
下座で
流し
讀
讀

上々 美徳を
和らぐ 云々 (ヤ)

和ほ
 有念不平
 商し
 悲し
 初り
 傷付
 續け

幸福、愉快、
 努力者、
 丁之に、
 明日、
 接き、
 丁之に、
 明日、

いつ
た
た
く
う

あ
系
の
足
は
靴
の
破
れ
の
水
の
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

孝主君の
 白石左衛門
 F 柳、電、ハビ、ワ、タ、

二
か
つ
の
意
か
ら
興
味
つ
た
ら
ば

漢の
 子

白雲寺

主部二かい、意か、

取
と
あ
は
た
は

齊
12

僂年
日
八
年
初

傷共價

4区
3区
やう
た

解法

曲
 左
 2
 2
 下
 }

金東秋
朝日新聞

(2) 出 国 の 途 中 に 係 り し や

50

2

1147

4.9
12

(712)

ゆるしや

1
1
2
7
10

停舟待月

$$1 =$$

1. 5

5

2

~~1~~

Tr
}

4.

德丹 9 猪 6
七 射 上 月 二

里人姥が 寧ろちいさなわく

秋の 土の葉の 木に

か風!

弟は口

も かりけり

いふ 姥と 運木たりし しく まで

可なり 姥と 運木たりし しく まで

弟は 朝から 難を 蒙るころ

に ういころ

信は 抱き入り 抱き入り

折る とき とき とき

秋

家 多い ちやま

今高

電燈

心志ありし者

११

4-12-19

45

4. 9

20

糸を縫う

係
72

苦くはい
ゆめ

和心
10
空
上
直
下
人
17
12
加
管
在
理
之
之
之
之

常々

超

12
4-
12
2
12
2
12

空

能生活苦啊 仁 百 何 本 了

和歌山県

10/11
3
4
12
±
3
2
3

うへも

外二流本

12

上
10
心
12
光
七
✓
0

OCT 5 1930

身時汁は同様に受けるもの

知れは風

心は枯れた

念に散る花芽の音

徒り馬場はよき母

そこには乃木健作の墓

帰る毛虫の新鮮な下着

信の毛糸は甘く滑る

恥は氣節の操性を示す

あまゝい

婦人の口伝

いかに及受のちび面

新生の意をいふ 氣節の宿願

に昇りていふ

と云ふ

経験と言ふ

生を覺ゆる事

若さ

例へば

生もつて重要

なり

下の方から

OCT 3 1930

人生は水である

運命は水である

雨が降れば

三日も雪が降り

仕度の上へ

上天を

下界を

人生とは

水である

OCT 10 1930

OCT 10 1930

OCT 10 1930

瞳の艶

枯草

紅葉

牒

斑

芳

山は化粧の香かえり

新雪

か

新雪

の道に視

つゝ

金髪が視

ころ

花

の

粧

に

蹲んで

色

に

4

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

心

や

ま

び

花

の

色

に

4

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

そ

を

あ

の

う

た

け

ら

の

こ

ろ

の

た

け

ら

の

こ

ろ

の

た

け

知はあつた

OCT 15 1930

OCT 20 1930

美
第 18 号

為

秋の涼風吹くころに
春の青い花を
また見たい

花は
 赤
 青
 紫
 白
 黄
 緑
 黒
 赤
 青
 紫
 白
 黄
 緑
 黒

糸 18 号 麻 5 本

朝明
康
治
徹
山
屋
は

4. 花の香に空を染める

この数字は、
途中に
春を
事には
おは

万有である
 空際である
 牛の乳
 牛の乳

今
二
ビ
物
は
男
お
じ
丁
外
一
一
春
を
三
二
三

勤動

12

高

OCT 25 1930

色 題の

秋 草

林 檜は山を白く染めし
夢とて

小 花は木々に
野をを叩き散らす

草 牛草

青 草が紅葉して

リスや免が跳ねて

秋 空の色は
霞の如く
銀白く
なると

そ あたしに

夢とて

私 は 白く染めし
夢とて

草 牛草

秋 空の色は
霞の如く
銀白く
なると

小 花は木々に
野をを叩き散らす

2の 11

4 父

(高)の 階

Handwritten notes in Japanese, including the word "階" (stairs/floor) and other illegible characters.

